

橋爪大三郎（無所属）

1980年に、あの衝撃的な論文「＜構造主義＞以後の社会学的課題」を「思想」誌上に発表して以来、著者内田隆三氏は、社会理論の分野のとびぬけて有能な論客として、たえず注目を集めてきた。本書は、その後続々発表された論考から、「消費社会変容」に関連するテーマのものをとり集め、推敲の手をさらに加えて一書としたものである。われわれ「理論と方法」の読者にとっても、待望久しい一冊と言えよう。

著者内田氏は、フランス現代思想の話題に通暁する。のみならず、近代経済学の貨幣理論や、コマーシャル・フィルムの分析、吉本隆明批判、……と、本書が扱う分野はまことに幅広い。その際著者が道案内とするのは、バタイユであり、ボードリヤールであり、そしてとりわけフーコーである。しかし著者は、そのフーコーさえも乗り越えて、まだ先に進もうとする。こんな緊迫感に満ちた本書は、変貌する現代社会をその深いところで思索する醍醐味を存分に味わわせてくれる、と言えよう。ハイ・テクノロジーに主導された日本が、国際社会にもうひと回り巨大な存在として登場しつつある今、まさしく本書は現れるべくして現れた書物なのだ。

題名の通り本書は、消費社会で権力がどのように働くかを考察する。「権力」といってももちろん、政治学が伝統的に考えてきたのとは異なる。社会システムは〈モノ／記号／身体といった基本的な要素を操作の対象〉とするのだが、その〈モノ／記号／身体を一定の形態にフォーマットし、同時にその基本形態に強固な実定性を付与する機能として権力という作用を考える〉(p. vi)のである。

ひとまず、論述の流れを追ってみよう。

まず最初に、消費社会変容、すなわち〈産業システムが自己準拠の構造をビルト・インしたことによって生じる……逸脱的なゆらぎ〉(p. 4) のイメージが提出される。かつて、実用一点張りのT型フォードが生産停止に追いこまれ、代わって多彩なデザインをまとったGM車の時代が始まったのであった。機能的なモノから超機能的なモノへの移行。それは当時、ひとつの徴候にすぎなかったが、いまはわれわれをとりまく現実である。価値法則は効力を喪失し、システムはコモダイズムの戦略に拠って、不足する需要を掘り起こし続けなければならない(第一章)。

こうした変容は、産業システムを支える部品の性能を狂わせるようになる。たとえば、貨幣はマネー・ゲームに、＜性＞はポルノ・コモダイズムに、死はメモリアル・アートに、それぞれ転回(ワシオン)をとげてしまうのだ(第二章)。またこの変容は、身体技術論のうえにも、当然およぶことになる。ここで、身体技術論とは〈身体空間を政治的な権力の媒介項として一定の形態にフォーマットする技術体系〉(p. vii) のことなのだが、〈この過程は主体として形象化される以前の生ける物質性としての身体を素材空間とする、政治技術論的なプロセス〉(p. 173) である、とされる。第三章「権力のオフ・シーン」では、権力、＜性＞、死の各領域で生じつつある

身体技術論の変貌が、具体的に論じられるのだ。

著者内田氏の思索と論述は、端然として淀みがない。それは、短くない年月を経て、十分練りあげられ熟成されたものである。読者はただ、はじめて緻密に描かれた先端産業社会の像の迫力に、脱帽するしかないかのようだ。たとえば、〈まばゆいばかりに切れ味鋭い概念が、あざやかな手さばきで、「消費社会変容」を切り裂いてゆく。……フーコーの「性の歴史」に次ぐ、そしてそれを凌駕する快挙〉(金塚貞文氏の書評、「クリティーク」10号)という具合に。

*

さてこの第一級の業績に、評者があえて異をさし挟む余地をみつけたら、それは、「消費社会変容」という概念が、どこまでの射程と包括性をもったものか、という点である。

「消費社会変容」は、古典近代からの逸脱的なゆらぎのように生じてくる。しかもそのゆらぎは必然だという。なぜか？ 著者の論理を追うと、こうなるのか。産業化は当初、主体＝身体に照準しつつ社会の内部(部分領域)で進行した、生産システムの合理主義的な再編と拡大のプロセスであった。産業化の最終局面で、このシステムは外部を失ない、自己準拠の戦略をとらざるをえなくなる(産業社会の、自己組織系としての立ち上がり)。この結果、たとえば、欲求に裏付けられた需要や、機能、主体……といった、システムを支えていた実定的な基盤がその内実をなくして変質をとげる(オフシーン)。産業化の果てには、超機能的な形象の戯れだけが増殖していくというわけだ。これは、ボードリヤールの与えた図柄を下敷きに、フーコーの引きかけたトポロジーの線分を現時点から将来にむけ延長して描いた像である、とも言えるかもしれない。

ところで、ボードリヤールの議論は大味なものだった。なるほど消費社会においては、効用の裏付けをもつ本来の商品とガジェットとが、混在しはじめるだろう。そして、どれがほんとの商品でどれがガジェットなのか、識別しにくくなるかもしれない。が、だからといって、生産システムが必要に一切背を向け、逸脱の無限軌道を暴走し始めたとみるのは、早計ではないか。消費社会変容は産業社会の「極点」に現れる、とのべる著者は、この見解を共有するのか否か？

評者は、「消費社会変容」として描かれた現象が現に生じている事実を、否定するものではない。しかしそれが、産業社会の終極形態だと主張されるなら、にわかに信じにくいのだ。かつて資本主義社会は「社会主義体制」によって終極すると言われたのに、そうでなかった。同じことを、「消費社会変容」についても考えてしまおう。それを、発展しつつある資本主義社会がたまにか陥った、ほんの一過的な状態とみることだってできると思う。技術革新が生産システムに織りこまれるまでの構造調整局面で、行き場を失った流動資本がうたかたの像を結ぶなどというのは、よくあることなのだ。たしかに古典近代の戦略を支えた主体＝身体という形象は、もうとりかえしのつかぬほど、テクノロジーの張りめぐらす編の目のあいだに拡散してしまったのかもしれない。そういう不可逆な現象が、産業システムの年輪を刻んできた。が、だからと言って、現在われわれの目にする徴候が、すべてこの産業システムの終極の姿を映しているということにはならない。そうかどうか、厳密な論証が必要だろう。この書物が、事柄の表面に密着し、産業システムの具体像をこれほどの密度で描き出しているのだから、かえってその必要を痛感する次第だ。